

平成23年度 【 学園研究費助成金 】 研究成果報告書

学部名 生活科学部

フリガナ カノ ノリエ
氏名 川野 紀江

研究期間 平成23年度

研究課題名 小学校施設余裕教室の地域利用と児童の安全を考慮した再生手法

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	川野紀江	生活科学部	助教
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

我が国においては、児童数の減少に伴い増加している余裕教室を、地域の共有資産として活用することが期待されている。地域社会の結びつきの薄弱化が問題となっている中で、小学校施設は地域のコミュニティ施設としての機能を果たす可能性がある。本研究では、名古屋市所有の公的施設の機能のうち、小学校の余裕教室がその機能を受け入れる可能性について分析を行い、児童の安全確保に配慮した余裕教室活用の検討に寄与することを目的とする。

2. 研究方法等 (300字程度で記述)

名古屋市の中でモデル区として、守山区を研究対象とする。

(1)市民利用施設を名古屋市提供の施設データベースより抽出し、施設種別に分布状況から偏在や分布の特徴を明らかにする。

(2)余裕教室の活用について、周辺公的施設との機能分担、周辺居住者のニーズ(市民利用施設利用者へのアンケート調査)を踏まえ、小学校施設に配置する機能の検討を行う。

(3)(2)の機能を余裕教室に配置する際の、児童の安全確保について検討する。(安全確保の手法については、本研究申請者の既往研究の成果も参考とする。)

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

(1)まず、名古屋市全域にある市民利用施設の偏在を明らかにした。施設のカバー圏域をボロノイ領域と仮定して見ると、例えば生涯学習センターは市の中央部に寄っているため周縁部の施設のカバー圏域は大きく領域の中心からずれている。カバー人口にも偏りはあり施設規模がそれに伴っているわけでもない。また、小学校区単位に配置されたコミュニティセンターも、カバーする人口や領域に差が生じていることが分かる。

(2)守山区の貸し室利用状況と分布について明らかにした。利用者アンケートの結果、市民利用施設の活動はサークル・同好会か教室・講座に二極化されていた。活動ごとの利用者の施設選択理由はどちらも「家からの近さ」、「集まりやすい」という立地に関する回答が5割以上を示した。現在の利用施設の代わりに利用したい施設についてはサークル利用者からコミュニティセンター、小学校への利用可能性がみられた。

守山区内市民利用施設機能の小学校余裕教室への再配置を検討した。機能利用者は施設への距離を重視しているため利用圏域を最小にする配置を考える。北部は現状の施設自体が少ないため利用可能性があった小学校へ機能を分散する。余剰教室のある小学校3校へ機能分散が可能である。この提案による機能の配置ではカバー人口が減少するため、施設の規模縮小をしなければ利用率を確保できない。

(3)小学校施設に共通する課題としては、児童と来客の動線分離が明確になされていないこと、玄関付近に受付がないこと、放課後の門が開錠されていることなどが挙げられる。余裕教室の地域利用にあたっては、防犯訓練、安全点検、関連組織との情報交換、周辺地域との連携といったソフト面からの安全への取り組みを含めた、総合的な防犯対策についての検討が必要である。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

①小学校	②FM	③地域利用	④余裕教室
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

日本建築学会等への論文投稿を予定している。